2. 教養学部の方法 —— 答えも探す、問いも立てる

教養学部長
塚　本　信　也

名は体を表わすとか。

「当たり前でしょう。名と実はいわば表裏一体で、経済学が学べるから経済学部と、経営学が学べるから経営学部と命名されているはず、仮に法学部に進学して法学が学べなければ“看板に偽りあり”ですよ」、学生諸君はあきれ顔をして、私たちに説いてくれました。

なるほど。

でも、ちょっと待ってください。翻って、皆さんの教養学部は如何でしょう。教養学部は教養学を学ぶところ、教養学を学べるから教養学部なのだ —— 皆さんがそう理解、ないしそれで納得しているのだとすれば、却って私たちは反問したくなります。では、教養学とは如何なる学問なのでしょうか、と。

実のところ、“教養学”という語は、人口に膾炙しているとは言えません。少なくともディシプリン（discipline、学問分野）として認知されているとは言い難い。いいえ、歴史が浅いからではありません。ルーツは古代ギリシャ・ローマ時代にまで遡れます。但だ、日本はそれを“教養学”ではなく“教養”と翻訳通用させてきたのです、“リベラルアーツ”（liberal arts）のことを。

とまれ、リベラルアーツの内容変遷については、図書館に探したり、インターネットに調べていただくとして（教養学部生が最初に取り組む課題に相応しい気も）、教養学部が先の５学部のような命名法に拠っていない、つまり「教養学＋学部」ではなく「教養＋学部」であるからには学び方も多少は違うのかな、そう勘の働く人がきっといるはずです。

先の５学部は、ディシプリンとして確固たる体系を有しています。アイデンティティが明瞭で、入口から出口まで頗る見通しがよい。その気になれば脇目も振らず一直線に進めます。看板に偽りなし、実に素晴らしい。しかし、良くも悪しくも、教養学部は違う。むしろ脇目も振る、別の誰かの靴も履いてみる。悪戦苦闘しつつ融通無碍に、人間を、文化を、情報を、地域を繋いだり重ねたり、俯瞰したり仰望したり、想定外も想定内に捉え、思考や方法の多様性多層性と学際性を身をもって確かめるのです。

思うに、教養学部らしさが充溢しているのは、学部共通科目でしょう。本学全６学部のうち、このカテゴリーを擁しているのは工学部と教養学部のみ、しかも３年次には敢えて専門教育のコアともいえる「演習」（通称・ゼミ）を置き、均しく４学科に開きました。どうぞリベラルアーツの名の下、各学科がショッピングモールさながらに揃えた50以上もの“専門店”を堪能してください。翌４年次、このゼミ群は30弱のチームに再編成され、「総合研究（卒業課題）」として大学最後の一歩を踏み出すことになります。たとえば「発達と社会的行動」、「日本社会の変化とライフスタイル」、「ヨーロッパの言語文化」、「表現と文化」、「情報科学と生命のメカニズム」、「コンピュータシステムの構築」、「人の暮らしと自然環境」、「少子・高齢社会と福祉」、「情報技術と社会」、「メディアの文化と産業」等々、チームテーマは千差万別にして多種多様、それは学問の方法や研究の対象が一つには括れないことを、正解が一つに限らないことを雄弁に物語っています。

当然、在学中には少なくない書物に目を通すことにもなるでしょう。本を開けば答えが書いてあるのかもしれませんが、大学生ですもの、何が書かれていないか、なぜ書かれていないのかにこそ注目してください。答えを探すのではなく、問いを立ててみる。バラバラにみえるあれとこれとの間に橋を架けてほしい、補助線を引いてほしい、イマジネーションを馳せてほしいのです。

ひとまず４年は誰にも平等です。どうか寸暇を惜しんでいただけますよう。